



Flyin' to the Sky

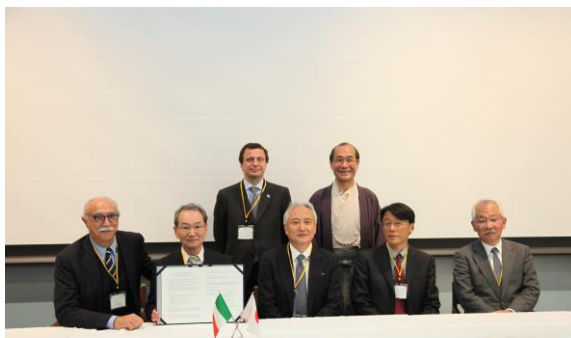
京都府立大学 国際センター ニュースレター

Mar. 2018 Vol.12

目次

1. イタリア学長会議と京都4大学連携機構が協定を締結しました
2. 国立華僑大学共同研究員としての半年間を振り返って
3. トビタテ！留学 JAPAN アメリカ人が住んでみたい都市 Portland に留学して
4. 2018 新春留学生との交流会が開催されました
5. 京都での留学は一生の思い出（東華大学留学生の体験談）

イタリア学長会議と京都4大学連携機構が協定を締結しました



調印式後の記念撮影。後列左からマルコ・ロンバルディ在大阪イタリア総領事と門川京都市長、前列左からイタリア学長会議のパヴィア大学ファビオ・ルッジェ学長と4大学連携機構の学長



在大阪イタリア総領事、イタリア23大学等及び京都4大学連携機構の学長等による記念撮影

平成29年11月1日、京都工芸繊維大学にて開催されたシンポジウム「Italy meets Asia: Scientific Venue in Kyoto 2017」において、イタリア学長会議（CRUI*）と京都4大学連携機構（京都工芸繊維大学・京都薬科大学・京都府立医科大学・京都府立大学）が「教育研究活動促進のための協力」に関する協定を締結しました。

この協定は、日本とイタリア両国の高等教育機関が科学技術分野における教育研究活動促進のための協力体制を構築し、交流を活性化させることを目的としており、そのための日本における交流拠点が京都に設立されることになりました。そしてその活動を京都工芸繊維大学が中心となって担うことになりましたので、教育研究活動においてこれまでから連携を深めていた京都4大学連携機構が、日本側の先導的な立場で、このたびの協定を締結するに至りました。

翌日11月2日には、京都工芸繊維大学において各大学の学校紹介と交流会があり、本学の宗田副学長が大学の概要を紹介し、出席大学の学長との交流を行いました。

今後、この京都の日伊交流拠点を核とし、教育研究活動促進のための協力体制を構築し、学生や教職員の交流等を行っていく予定です。

* CRUI：イタリア国内の国立大学及び一部の私立大学を合わせた77大学の大学長の協会で、学术界の代表として大学システムの根幹に関わる提案、協議、連携・協力等を行っている団体（協定は、CRUI加盟校のうち今回39大学が締結）

（国際センター事務局記）

国立華僑大学共同研究員としての半年間を振り返って



国立華僑大学 専任講師
京都府立大学共同研究員
高江菡

力して調査や研究ができると思ひ至りました。今後の私の研究の希望は、京都市の鴨川公園や桂川、宇治川を調査研究の対象地とし、都市の生態学的視点からその空間の環境を調べ、中国との違いを見つめ、将来的にも協力できる研究の可能性を探り続けたいと思っています。

日々の生活の中で私は、学生や教職員の皆様と相互交流することで中国と日本の文化の違いをより深く理解できたと思います。中国と日本の学生にとっては、相互に交流し、その違いを深く学ぶことが大切です。日々の交流の中で中国の地理や歴史、音楽などに加え、中国園林、現代中国の風景園林の状況など、府立大学の学生や教職員の皆様とも相互に理解しあえると思います。

京都府立大学での半年間、私を受け入れて頂いた教職員と学生の皆様、そして京都市民の皆様からの温かい友情、配慮を頂いたことに感謝し、日本の伝統と現状を深く学べたことに謝意を述べたいと思います。最後に、未来に向けて国立華僑大学と京都府立大学との協力と交流がより一層深まって行くことを願います。

(翻訳：福井亘)

一研究者として、京都府立大学との学术交流と研究をすること半年、来日してすぐの頃は、何事も手探りでしたが、今では色々と一人で出来るまでになりました。この半年間で教職員の方や学生との相互交流ができたこと、研究室では今まで私が行ってきた研究課題や研究方法とは異なった視点で学べたこと、さらに京都の名園を実地調査し、中国と日本の違った文化の雰囲気を感じることもできたことなど、私にとって得ることが多いものでした。

京都は、著名な歴史や文化、城郭もあり、京都の町とその景観の中には貴重な歴史の跡が残っているだけではなく、住む人たちにとっても日常生活を満足させる町だと思いました。私の専門は、風景園林（ランドスケープ）の計画と設計です。京都の町の景観、および歴史的な庭園には興味があり、庭園をみると、その深く魅力的な庭園群に感動を覚えます。福井先生と同行し、宮内庁の四離宮庭園（桂離宮、修学院離宮、仙洞御所、京都御所）、寺院の塔頭庭園などを見て学び、回遊式庭園、枯山水庭園、池泉庭園、坪庭など様々な庭園について学びました。私自身、日本庭園の構成や立地状況、そのスケール感を体感でき、借景や植え込み、石の配置、水の流れなどが中国の園林（庭園）と異なること、そこには禅宗の表現としての庭園、心の中までを見つめなおす庭園の在り方を学びました。多くのことを教えてもらい、多くの資料から学んだことを帰国後、日本庭園の講義にて、この得られた多くの知識から、学生たちへ正確かつ専門的な情報を伝えることができると考えています。

研究に関しては、福井先生の研究課題について深く理解することが出来ました。先生の授業を聴講し、同時に学生と京都御苑の鳥類調査にも同行し、関連する調査や研究方法を知りました。また、ゼミにも参加して学生のゼミ発表を聞き、研究内容と調査方法を具体的に学ぶことで今後協



トビタテ！留学 JAPAN アメリカ人が住んでみたい都市 Portland に留学して

生命環境科学研究科 都市計画研究室 博士前期課程 山崎彩弥佳

留学先：アメリカ・ポートランド

The City Repair Project (2017年10月～2018年3月)

Kaplan International English (2017年10月～2018年1月)

トビタテ留学！JAPAN 日本代表プログラムとは？

官民協働で取り組む留学支援制度です。留学計画を自分で自由に作成することができます。世界中に飛び立つ仲間がいて、各々が様々な目的を持って留学し情報を共有でき、また相談し合えるのがこのプロジェクトの強みです。



VBCに関するワークショップ

留学のきっかけ

旅好きの私は、旅を繰り返す中で旅行ではなくその土地で住んでみたいと強く思うようになりました。訪れた中で、最も私が暮らしてみたいと思う街がイタリアでした。ただ折角イタリアに住むのなら、自分の興味がある分野を学べる大学院でその勉学に励みつつ、現地での生活を楽しめる留学の制度を活用した方が将来の自分の身になるものも多いのではないかと考えました。そこで今回のプログラムにチャレンジしてみることにしました。

留学までの取り組み

今回のプログラムの申請書類を書くのに大変苦労しました。特に、自分が挑戦してみたいこと、また今まで経験してきたことに対して全て自問自答し、読み手に熱い想いを伝える文章作りで苦労しました。しかし、当初行きたいと考えていたイタリアの大学院の受験に不合格になってしまいました。ただ申請書類の作成の過程で様々な情報を調べる中で、海外で学びたいという思いは強まっていたため、次に研究分野であった都市計画が学べる持続可能なまちづくりを行っている、アメリカのポートランドへ再度挑戦してみることにしました。留学先で学ぶことが変わり、かつ短期間で再度書類を提出しなければいけなくなった中でも、留学計画の内容を前回よりも濃い内容に仕上げる必要が出てきました。しかし、この作業をしてみると実際に自分がしたかったことと新しくしようとしていることに繋がりがあることが発見できました。

留学先での活動

私は留学先で研究室での勉学に加えて、街づくりを行う NPO: The city repair で半年間活動してきました。この団体は“Work together”という理念を最も大切にしてコミュニティデザイン的活動を行っています。例えば、



日本文化のワークショップ (右：山崎さん)

その理念を体現しているイベントとして、交差点にイラストを描くイベント (VBC: Village Building Convergence) のワークショップを行うなど、市民を主体的に巻き込む形でコミュニティデザインの活動に取り組んでいました。そもそもなぜこの団体が生まれたのかということ、代表を務める Mark Lakeman が、グローバル化が進む中で身近な人々との繋がりはあるのかと疑問を抱いたことがきっかけとなっています。彼は、人と人との繋がりが安全な街を築き、人が集まる場ができて持続可能なコミュニティが構築されると考え始めたのです。

毎回ワークショップで食事が出されます。私は、この準備を手伝っていました。また、廃材を使ってタイニーハウスを作る体験もしました。VBC のワークショップでは、グループごとに分かれて今年はどういうイラストを描くか、コンセプトは何にするか、ということも多くに参加者に混ざりながら、アイデアをカタチにしていきました。一緒に活動するうちにこれらの参加者は、自分たちの街を自分たちで良くしようという考えが強いと感じました。

留学を経験して感じたこと

夢だった海外に住んでみるという何気ない想いを叶えた今、私がこの留学を通して感じたことは、一度諦めかけた夢も、強い思いを持ち何度でもチャレンジすることで非常に大きな経験を得られる、ということです。アメリカ・ポートランドでの半年間の生活は、より一層私に日本の良さを気づかせてくれる体験をさせてくれる時間でした。さらに現地の生活で感じたことは、自分からできることに率先して取り組む重要さです。そして、何よりも感じたことはチャレンジ精神の高さです。固定概念にとらわれずに、チャンスがあればやってみる精神が多くの人に感じられました。

これらの気づきは、留学してみないとわからないことでした。留学を考えている皆さんにはきっと多くの悩み事があると思いますが、悩んでいるくらいなら挑戦してほしいです。一歩日本から出ると、世界ではどう自分が周りから見られているかではなく、どう自分が人に見られたいかをプレゼンする日々の生活が待っています。当たり前にとらわれずに、今やりたいことを挑戦することは今後の人生で必ず生きてくると思います。

最後になりましたが、トビタテ！留学 JAPAN でお世話になった学校関係者の方々には深く感謝申し上げます。

2018 新春留学生との交流会が開催されました

留学生の皆さんに日本人学生との交流を通じて、日本の暮らしや学生生活に慣れていただくことを願い、学生部委員会学生部会では国際交流事業を実施しています。

新春1月11日(木)午後6時から、学生部委員会留学生部会・府立大学後援会・生協主催、流木祭新歓夜祭実行委員会・文化会・体育会共催で、生協食堂において、「2018 新春留学生との交流会」が開催されました。留学生11名、日本人学生40名、教職員等を含む66名が参加し、第1部では日本のお正月 京都のお正月 と題して、福笑い、けん玉、こま回し、だるま落としの昔の玩具を使った遊びの中で、国境を越えた交流の輪がひろがりました。

第2部では食事をしながら、参加者同士が自己紹介を兼ねて、名前ビンゴが行われ、学生たちの進行のもと、とても盛り上がりました。

また、参加者には「お餅料理のレシピ」付きの紅白小餅がお土産として配られました。

(国際センター事務局記)



京都での留学は一生の思い出



東華大学外国語学院大学院
日本文化専攻 宋怡娜

知らず知らずのうちに時間があっという間に流れて、京都府立大学での留学もこの原稿を書いている時点で四ヶ月が経ちました。去年のことを振り返ると京都に来た1日目の記憶は今なお新しいものがあります。関西国際空港で日本の地を踏んだとき、初めて日本へ来たのではないにも関わらず、胸がわくわくしました。その日は、新たな空気と暖かい日の光に恵まれた九月末の秋晴れの日で、府立大学に到着したのは午後3時頃でした。文学部日本・中国文学科の4回生山田梨紗子さんが学校の正門で私たちを出迎え、それから企画課の方と一緒に私たちの宿泊施設や生活に必要な事柄について丁寧に案内してくれました。宿泊施設は学校のそばにあり、古いですが、日常生活を送るには十分に充実しており、かつ便利です。一切が順調に進みつつ半年の留学生活が始まりました。

研究生としての私は歴史学科に属して勉強しています。アジアの文化圏における日本と中国は一衣帯水の隣国ですし、日中関係のいきさつについて研究したいと思っています。今後、修士論文を完成するためには資料を多方面からまとめるとともに、日本語の本を読まなければなりません。普段、授業に出る以外は図書館をいつも利用していま

す。去年落成した新しい図書館は勉強するにふさわしい雰囲気がありますが、日本語の本を読むのはなかなか難しいです。そんな時、自分の日本語能力がまだまだ足りないと感じて困ってしまいます。平素日本人と交流する時も自分が話したいことをうまく言えないし、意味不明なので相手も理解できません。だから、事前に単語をたくさん覚えてから、自分の意思をはっきり伝えるようにしています。勉強は辛いですが、その間に思いがけなく楽しいことも出てきました。日本へ来る前は、日本の文化について職人の精神や礼儀正しい民族性など表面的なものしか分かりませんでした。それに関係のある本を読んでからは少しだけ文化の深い意味がわかるようになりました。また歴史が長く古い都市としての京都には、至る所に伝統文化に浸ることのできる場所があります。神社やお寺など観光名所が多いイメージがある京都を感じるのみならず、人々の楽観的な態度と緩やかな生活リズムにも感銘を受けました。だから、賑やかな大都市より静かな京都のほうがもっと好きです。もしここで長く住むことができたなら悪くないかなと偶に考えます。

学習と観光以外に府立大学が留学生のために開催した色々なイベントにも参加しました。みなさんの情熱やお心遣いに心より感謝いたします。日本に居た時間は長くなかったですが、留学できたことはやはり楽しかったです。

発行日 2018年 3月

発行責任者 国際センター長 川瀬光義

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

TEL: 075-703-5905 Email: kokusai@kpu.ac.jp